

「ジオラマ作り」再び

念願叶え、南原小へ寄贈



完成した2作目のジオラマと共に満足そうな表情を浮かべる有志メンバー（前列左端が榎山会長）

区内上作延エリアを拠点に活動している老人会「最勝会」（榎山次郎会長）のメンバー有志が、自分達の住まいがある地元の街並みを再現した立体模型「ジオラマ」を制作した。同会のジオラマ作りの取り組みは、昨年5月に次いで2度目。今回の力作は近隣にある南原小学校に寄贈された。

上作延周辺の環境や背景などを立体的に表したこのジオラマ作りは、コロナ禍の影響で従来の催し等が軒並み中止となった同会が、新たな活動の

方向性を求めて昨年初めに実施したもの。参加したのは榎山会長のほかメンバーの三田久幸さん、小泉春夫さん、渡辺寛さん、益寿計さん、清水輝

男さんの6人。さらに今回から新たに小原有三さん、関口隆雄さん、船木忠武さん、三田義之さんの4人が加わり、有志10人が、約半年間にわたり制作に取り掛かった。

新たに「送電線」も過去にこうした制作物を作ったメンバーがおらず、文字通り手探り状態からのスタートとなった前回と比べ、2度目となった今回の過程は順調そのもの、といった様相で進捗。前作で考案した

「上作延エリアの明細なマップを畳半帖サイズにまで拡大コピーし、これをジオラマの土台とする」といった手法はそのままだに、より精巧な作品づくりを目指し、皆でアイデアを出し合い作業を進めていったという。

その結果、前回も高さを必要とする模型を作る際に重宝した「発泡スチロール」についても、今

前作の手法を活かして精巧さを増した作品に

作では、ジオラマ作りにより適した素材を見つけ出し建物を手く立体化させることに成功した。さらに前作では表現しきれなかった「鉄塔」「送電線」を登場させることで造形物との大きさの対比がしやすくなり、色調とのバランスもそれた作品に仕上がっており「リアル感をより創出できたと思います」と、メンバー達もその出来栄に自信をみせている。

「授業で役立てて」ほぼ丸1年を費やして

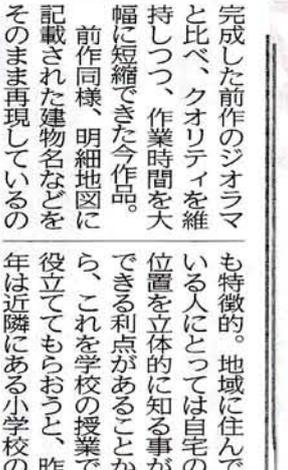
完成した前作のジオラマと比べ、クオリティを維持しつつ、作業時間を大幅に短縮できた今作品。前作同様、明細地図に記載された建物名などをそのまま再現しているの

も特徴的。地域に住んでいる人にとっては自宅の位置を立体的に知る事ができる利点があることから、これを学校の授業で役立ててもらおうと、昨年は近隣にある小学校の

うち、上作延小学校に寄贈した。今作はもう一つの近隣校となる南原小学校へプレゼントする事を決め、先ごろ贈呈セレモニーが同校で行われた。

＝中面＝

オーブンボーイの 結束力が、 最勝会



ジオラマを南原小・澁谷校長（作品左）に手渡した

「初代」も活躍中
昨年、栄えある初代のジオラマが贈られた上作延小学校では、既にこれを教材として上手に活用している。同校の小林智子校長によれば、コロナ禍で三密を避けるために児童が一斉にジオラマを
見学するよう催しは行っていないものの「主に3年生の子どもの『自分たちの街を学ぶ』という授業で役立っていますよ」との事。ジオラマは、同校に通う外国籍や帰国子女の児童が日本語を個別に学ぶための教室に常設されているため「（こうした子ども達がある場所などを見つけては、とても喜んでいませぬ」とも。
榎山会長は「ジオラマ作りの取り組みで、子ども達が地域により一層、愛着を持ってくれる契機になれば嬉しいですね」



困気に包まれていた。
「初代」も活躍中
昨年、栄えある初代のジオラマが贈られた上作延小学校では、既にこれを教材として上手に活用している。同校の小林智子校長によれば、コロナ禍で三密を避けるために児童が一斉にジオラマを
見学するよう催しは行っていないものの「主に3年生の子どもの『自分たちの街を学ぶ』という授業で役立っていますよ」との事。ジオラマは、同校に通う外国籍や帰国子女の児童が日本語を個別に学ぶための教室に常設されているため「（こうした子ども達がある場所などを見つけては、とても喜んでいませぬ」とも。
榎山会長は「ジオラマ作りの取り組みで、子ども達が地域により一層、愛着を持ってくれる契機になれば嬉しいですね」

外面から
づく
贈呈セレモニー、和気藹々
精巧な作りで驚く場面も